団塊世代若者文化とサブカルチャー概念の再検討

――若者文化の抽出／融解説を手がかりとして――

伊奈　正人

1．問題の所在

60年代におけるいわゆる団塊世代の若者文化は、反抗的な対抗文化、サブカルチャーの典型例として語られてきた。しかし、70年代以降若者は変貌し（小谷[1998]）、サブカルチャー神話の解体が問題として提起されたりもした（宮台他[1993]）。こうした神話解体の言説は、若者の世代変化　サブカルチャーと呼ばれたものの変化などに着目し、言説の錯綜を正すことを、眼目としたものであった。実際、いくつかの論点がからみあって、錯覚が誘発されていた。論点とは、たとえば次のようなものである。

・若者が変貌したこと。若者が反抗性を失い内向的、享楽的になったこと。
・団塊の世代が「大人」になったこと。
・団塊の世代の文化が多くの人が享受するポピュラーな文化になったこと。
・そのなかで商業化された「サブカルチャー」という名の娯楽的な文化が登場したこと。
・ポピュラーな文化、大人の文化になったことで、団塊世代の若者文化はメイン化されたということ。
・消費社会の多様化、多元化のなかで単一のメインが成り立たなくなったこと等々。

錯綜とは、かつて若者といわれた者、かつて若者文化と呼ばれたもの、その特徴を括るサブカルチャーという言葉、今日の若者、今日の若者文化、若者文化以外のさまざまなサブカルチャー、そしてサブカルチャー一般などが、渾然と語ら

れていることである。錯覚とは、「サブカルチャー神話解体」後も団塊世代の若者文化＝サブカルチャーというステレオタイプが、いろいろな認識に影を落としていることである。その結果、サブカルチャー一般の終焉が説かれたりすることもある。本稿は、こうした状況を踏まえ、「サブカルチャーのメイン化」や「若者文化の終焉」の意味を再検討し、そしてサブカルチャーという視点の今日的意味について吟味しようとするものである。

この団塊世代の若者文化の位置を理論的に再検討することで、サブカルチャー概念の意義を再確認しうるのではないかというのが、本稿の仮説である。ここでは、「若者文化の抽出と融解」という論点を提起した若者文化の抽出／融解説（山田2000）を手がかりに、検討をすすめる。この議論は、詳細に若者文化の変貌論、終焉論などなどをレビューし、「サブ－メイン構造」の顕在化と融解の過程を総括した労作である。この抽出／融解説の意義を再確認するとともに、議論の妥当性範囲を限定することを通じ、サブカルチャー概念の今日的意義を提示したい。(1)

まず第一に、抽出／融解の論理を下位性（２－１）、対抗性（２－２）、実体性（２－３）という三点に整理する。第二に、それぞれの議論について妥当性範囲を限定する（３－１～３）。そして、「サブ－メイン構造」において、「メイン化」のプロセスに着目する視点を提起する。第三に、この視点の立場を、「文化相関主義」、「批判的機能主義」として括り、サブカルチャー概念の原点と筆者が考える

(1) 本稿のモチーフとなったのは、ひとつに、増田聡氏が、氏が管理運営されるネットサイトに書いてくださった次のようなコメントである。「ジェンダー論に対して小谷野敦『男であることの困難』（新曜社）が差し挟んだ異論を、（日本の）カルチュラル・スタディーズに対して提出していると・・・言えるかもしれない。・・・小谷野の『恋愛』に対応する伊奈のターゲットはサブカルチャーにおける『東京』、正確に言うなら『上京文化』である。なぜ『地域文化』は東京からの眼差しによってオリエンタリズム化、あるいは『東京の真似事』と化して／見なされてしまうのか。この問いを可視化することは、出版を含む『支配的』メディアが地理的な位置としての東京の文化環境を自明のものとする限り極めて困難だったのではないか。なぜ岡山の、あるいは仙台の（あるいは任意の『地方』の）文化はサブカル的に『おしゃれ』でありえないのか。なぜそのような問い直しが『田舎者のヒガミ』と受け取られる言説構造に編入されてしまうのか。すなわち、『地方』と『東京』という差異を隠蔽することによってサブカルチャー研究は『先端的なる様々な意匠』を名乗ってきたのではなかろうか、という疑問を伊奈は突きつけているように思える（最近の沖縄研究の流行もその文脈から読み直されるべきかもしれない）」（http://member.nifty.ne.jp/MASUDA/rock/rock99-10.html）。このコメントにより、筆者はカルチュラルスタディーズと自分の研究の関連を自覚することができた。また、小谷野敦氏の「モテナイ男的なもの」と比較されることにより、サブカルチャーに対する問題意識をより明確にすることができた。すなわち、「下位のもの」「モテナイ者」は、「メイン化」「モテル」ことへの渇望と僻みを余儀なくされる構造のなかにあり、それがカルチュラルスタディーズ的な言説の「メイン性」を批判的に照らし出すということである。

シカゴ学派社会学のコンテクストを学説史的に検討する(4)。そして最後に(5)総括を行う。

サブカルチャー概念の定義について、とりあえず一言だけしておく。1997年のサブカルチャーのリーディングス（Gelder&Thornton［1997］）と前後し、難波功士［1997］、吉見俊哉［1988］、上野俊哉・毛利嘉孝［2000］、仲川秀樹［2003］らにより、サブカルチャー概念の整理が行われた。象徴的相互行為論の集合行動論を中心に整理した仲川をのぞき、それ以外の議論が、ほぼ共通に言及しているのが、次の諸点である。①サブカルチャー研究の社会学的起源としての20世紀初頭のシカゴ学派。都市貧困層やダンスホールの研究。②サブカルチャーのサブカルチャーたる特質を認知した逸脱論、ラディカル社会学。60年代のサブカルチャー。③ホール、ヘブディッジ、ギルロイ等のいわゆるバーミンガム学派による70年代以降のサブカルチャー研究。イギリスの貧困層の文化、メディアや性の研究。④バーミンガム学派から派生するアメリカ、オーストラリア等などの諸潮流。ここでは、逐一のレビューをくり返すことはせず、とりあえず「一定のメインの文化、システムに従属しながらも、相対的に自律性をもった文化」という事典的定義（伊奈［1999］）を確認する。(2) 以下の行論のなかで、「サブのメイン化」という論点の関わりでこの定義を吟味し、「サブ－メイン構造」を異化する機能主義的概念として、サブカルチャー概念が提起されることになる。それは、総括的なものではなく、「メイン化」をクローズアップするための、いわば戦略的視点として提起されることになる。

2．抽出／融解の論理

2－1．下位性のメイン化

団塊世代は、「高級－低級」というバリアを異化した。もちろんそれ以前からバリアは顕現していた。団塊世代の画期性は、サブカルチャーとしての若者文化が社会的な影響力をもったことである。(3) サブカルチャーをサブカルチャーと

(2) この事典的定義の他、伊奈［1999:149-151］は、「下位性」「周縁性」「雑種性」「大衆性」「柔軟性」「身体性」「場所性」「生活性」などから、サブカルチャー概念を検討した。

(3) プレスリーが、アメリカの代表的なショー番組であるスティーブ・アレン・ショーやエド・サリバン・ショーに登場したことは、すでに公刊した論考で触れた（伊奈［2000］）。しかし、これはエスタブリッシュメントの反感を買ったことは否めない。この点で、「ツイスト」の大流行は、特筆される。ビデオ資料『ロックの歴史』には、上院議員夫妻などが、ダンスホールにツイストを踊りに来たことが、描かれている。（ビデオ資料 *The History of Rock 'n' Roll* vol. 2 Warner Bros., A Time Warner Entertainment Company）。

して――学問的認知にとどまらず――社会的に認知させたのは、60年代の若者文化であった。若者たちは人種、戦争、暴力、性等の問題と向かい合い、異議を申し立て、様々な生活実験を行った。そして、かつては低俗な欲望・身体動作、暴力や退廃の象徴だったロック音楽、長髪、ミニスカート等は、人間性に正直な表現として受容された。最初はいささか好ましくない逸脱にすぎなかった若者の文化は、人口に膾炙し、市民権を得る。やがて、若者文化は、高級文化を享受していた階層にも受け入れられるに至った。これは、あたらしい流行経路の開発である。

対抗的なものであった「高度に実験的スタイル」が一般的に受け入れられ、広まることでメインストリームを形成した。そして、若者文化＝下位文化という同定は無意味化しているのではないか。抽出／融解説は、このような分析に立脚するものである。抽出／融解説は、下位的なひとつのサブカルチャー＝60年代若者文化のメイン化というプロセス、すなわちジンメルの流行論、いわゆるトリクルダウン説とは異なるサイクルを指摘した点で、大きな意義を持つことは確かである。

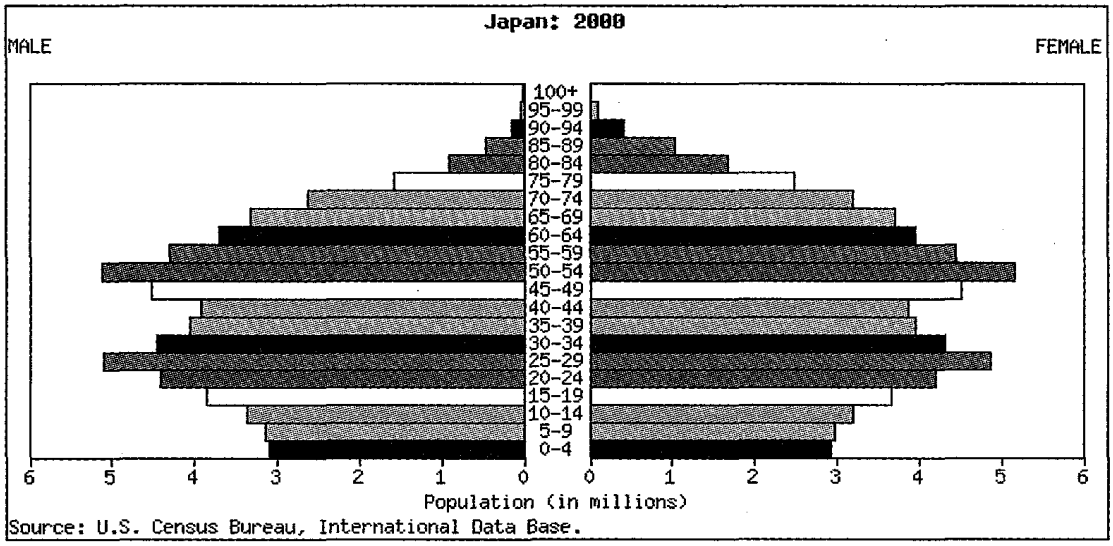
ここで問題なのは、若者がなぜこのような影響力を持ったかである。抽出／融解説の論点整理からは、横道にそれることになるが、この論点についても、一言しておきたい。さまざまなマイノリティの「公民権」をめぐる運動、ベトナムをはじめとするアジア、アフリカ、中南米におけるアメリカの戦争に対する反戦運動が、大きな影響力をもったということはあるだろう。冷戦を背景とした東欧からの対米工作によって、若者の運動が煽られたという見解も存在する。

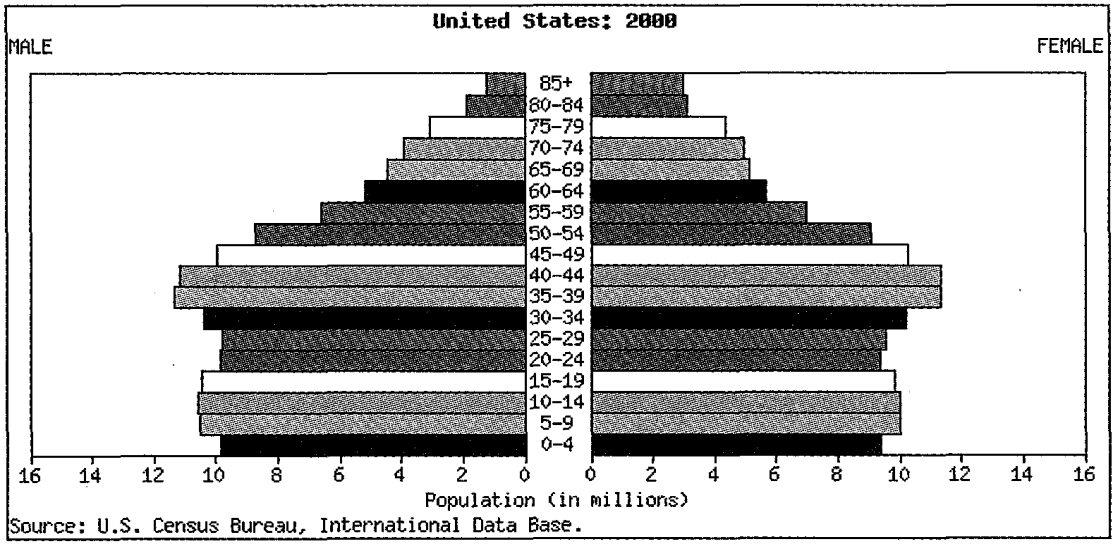
しかし、団塊の世代が、団塊たるゆえんは、「ベビーブーマー」だからであり、人口数の影響力というものが、なかば自明のこととして、とりざたされてきた。筆者も、人口数と影響力の因果関係を前提に、2003年日本社会学会大会で報告を行った。そこで原俊彦氏より、この論点について批判的なご指摘をいただき、さらに後日メイルをいただいた。ご批判は、団塊の世代は、人口数が圧倒的であるがゆえに「高級－低級」というバリアーを顕在化させたと、筆者が単純素朴に前提としていることに対するものである。

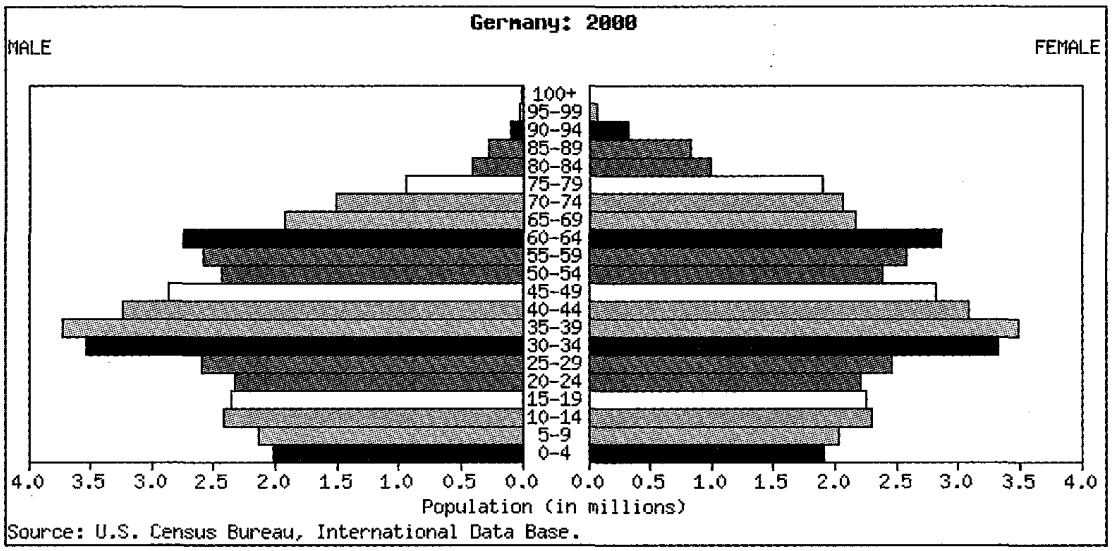
原氏は言う。「よく考えてみると、戦後ベビーブームは、日本、ヨーロッパ、アメリカなどで、時期が微妙にズレているはずで、ベビーブーム世代＝1960年代文化という図式は、もう一度、考えるべきではないか？」（メイル：原 to 伊奈 2003/10/16）と。そして、原氏は、US センサスのサイトからデータ加工して、日本、

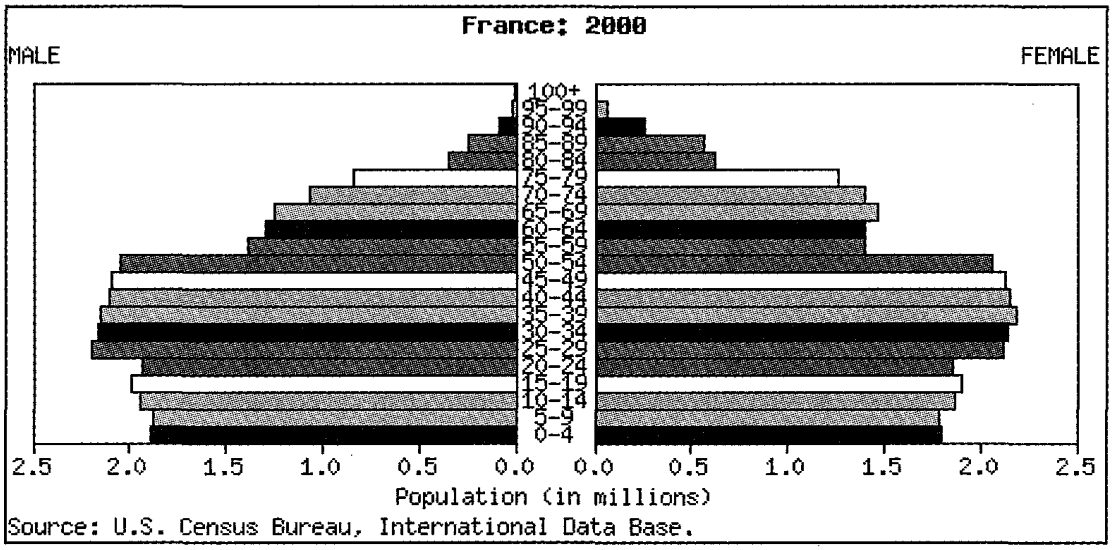
アメリカ、フランス、ドイツ、中国の2000年の人口ピラミッドを提示し（図表を参照)、次のように言っている。「これをみればわかるように、日本の場合、2000年現在50－55歳に当たる世代が、いわゆる団塊の世代で、確かに圧倒的な人口数（正確には出生コーホート規模）なのですが、同じ現在50－55歳の人口規模を、アメリカ、フランス、ドイツ、中国でみると、とても圧倒的な人口数とは言えず、ドイツなどは、むしろ前の世代より少ないことがわかります。これは、戦後のベビーブームに戦勝国と敗戦国などでズレがあるためです。また、日本以外で、もっと若い世代の人口規模の方が大きいのは、1964年前後のピル導入直前に出生力のピークがあることによります（中国は、内戦や大躍進運動による飢餓など)。で、

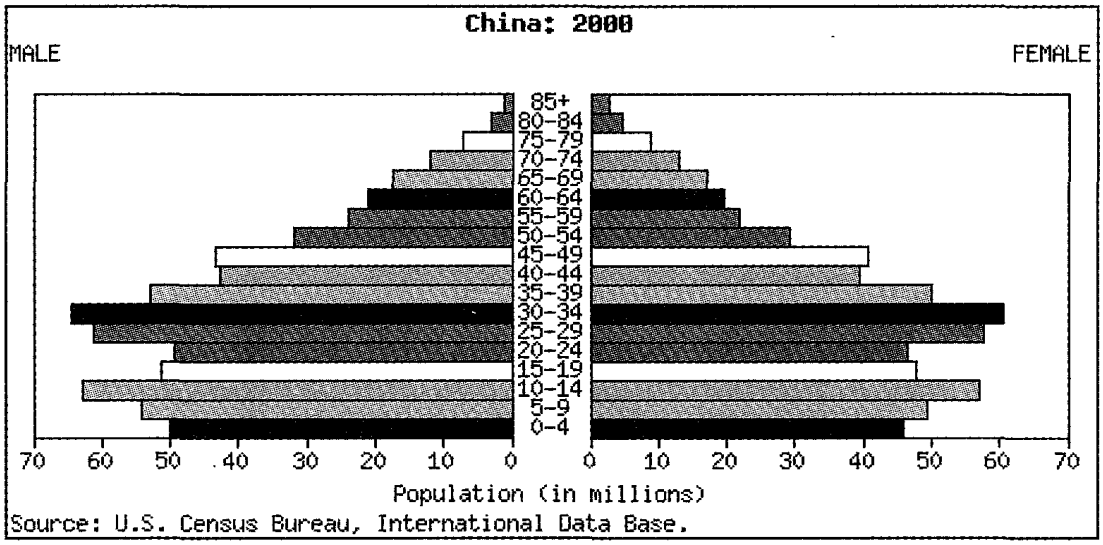
図表：各国の年齢別人口構成（2000年）

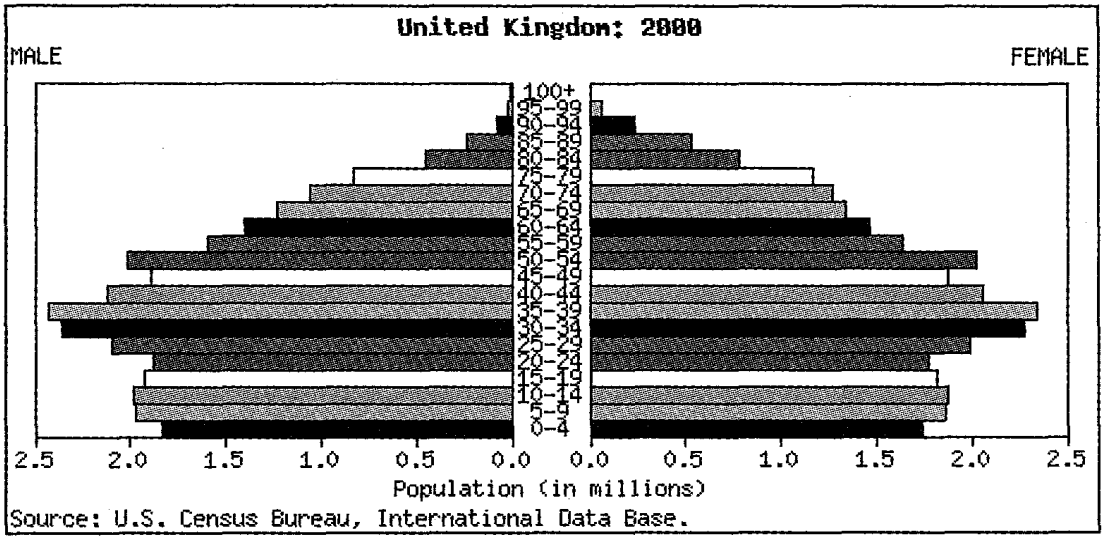





Germany: 2000
MALE
FEMALE
100+
95-99
90-94
85-89
80-84
75-79
70-74
65-69
60-64
55-59
50-54
45-49
40-44
35-39
30-34
25-29
20-24
15-19
10-14
5-9
0-4
4.0 3.5 3.0 2.5 2.0 1.5 1.0 0.5 0.0 0.0 0.5 1.0 1.5 2.0 2.5 3.0 3.5 4.0
Population (in millions)
Source: U.S. Census Bureau, International Data Base.


France: 2000
MALE
FEMALE
100+
95-99
90-94
85-89
80-84
75-79
70-74
65-69
60-64
55-59
50-54
45-49
40-44
35-39
30-34
25-29
20-24
15-19
10-14
5-9
0-4
2.5 2.0 1.5 1.0 0.5 0.0 0.0 0.5 1.0 1.5 2.0 2.5
Population (in millions)
Source: U.S. Census Bureau, International Data Base.


China: 2000
MALE
FEMALE
85+
80-84
75-79
70-74
65-69
60-64
55-59
50-54
45-49
40-44
35-39
30-34
25-29
20-24
15-19
10-14
5-9
0-4
70 60 50 40 30 20 10 0 0 10 20 30 40 50 60 70
Population (in millions)
Source: U.S. Census Bureau, International Data Base.



これからもわかるように、どうも、人口規模の大きさが文化状況を左右するとは言えないと思われます」(同メイル)。

図表をみてもわかるように、原氏の指摘は、人口数と因果づける俗論、およびそれに単純安直に依拠した筆者の報告がもっている問題点を痛撃しているように思われた。それはまた、一つの研究課題を提起していることを確認しておきたい。すなわち、団塊の世代が影響力をもったということはまちがいないが、その影響力のなかみについては解明されておらず、それは現在も未解決の課題ではないか。これが、原氏の批判である。ここで、報告の不備を反省し、また重要な課題を確認したいと思う。なお影響力については、２－２－３で若干言及する。

２－２．対抗性の消失

さて、抽出／融解説の論点整理に戻ることにしよう。２－１で述べたメイン化とともに、抽出／融解説が指摘するのは、若者文化における対抗性の喪失である。そこでの論点は、70年代以降のラディカル運動沈滞、そして大量消費社会の展開を背景にした、商業主義化ということである。

２－２－１．商業主義化

60年代、エスタブリッシュメントに対する異議申し立てなどのかたちで、団塊世代の若者は自己主張をした。しかし、「ゆたかな社会」のなかで若者の対抗性も消失した。文化の場としてのストリート、カフェ、ライブハウス等「高度な実験」の場が、ポピュラーな文化の場となった。

人口に膾炙し、メイン化する過程で、若者文化は商業主義化して、楽しく消費されるポップな文化と化した。抽出／融解説が指摘する対抗性の消失とは、こうした商業化という論点が主であると思われるが、もう一つ制度化と呼ぶべき論点へと拡張し、解釈できるだろう。この論点を追補して、検討を加えておく。

２－２－２．制度化

ソビエト的な左翼思想とは峻別される人間の顔をした政治的対抗性のスタイル、実験的な生活文化のスタイル、そうしたスタイルを具現する自由なネットワーク、チャンネル、スペースの形成と拡がりなどを、団塊の世代は提示した。さらに、若者の異議申し立てや、ネットワーキングの思想・スタイルは、国際協力、ジェンダー、環境等をめぐる政治参加・交渉の組織（NPO や NGO)、生活実践の文化として制度化されてゆく。

60年代から今日に至るまで、エスニシティ、ジェンダー、障碍者、高齢者など多様なディバイドが批判され、多様なバリアフリーのかたちが提唱されてきた。いくつかのバリアを解決する政策的試行が行われ、ボトムアップな民主的経路が定着しつつあるのも事実である。社会運動の制度化、多種多様な参画社会の開発等などは、そうした「サブのメイン化」＝資源動員を理念とした新しいスタイルの形成であり、かつての対抗性の脱構築であるとも言える。

たとえば、ラディカルな思想的立場に立つアメリカの学生運動組織 SDS のリーダーであったトム・ヘイドゥンは、その後カリフォルニア州の議員になり、そこでの社会運動を主導してゆくことになる（Hayden [1964]、Miller [1987]、Hayden [1988])。そして、いわゆるアドボカシー的な運動のあり方などにつながるようなスタイルを生み出し、あるいはグローバル・ガバナンスのような考え方にもつながる、能動的な社会のあり方が探求された。

２－２－３．偶然性

対抗性という問題と関わり、もう一つ論点を追補しておきたい。それは、偶然性という論点である。それは、対抗文化として若者文化、サブカルチャーが抽出されたのは、歴史的偶然にすぎないのではないかということである。すなわち、大きな影響力をもった世代が、たまたま対抗的な文化を形成していただけではないか。対抗性は若者文化の本質的特徴とは言えないのではなかろうか。

上にも述べたように、ベビーブーマーが国により人口の少ない世代であったと

いうことは、十分に確認されるべきであろうし、また安直な因果づけは慎むべきであろうと思われる。しかし、科学的因果関係はともかくとして、若者の影響力は、この世代の圧倒的な人口数と関連づけられることは少なくない。60年代若者の影響力が、「圧倒的な人口数をもった世代」を構築していたとも言えるだろう。

人口が、サブカルチャー顕在化の契機として議論されたことは、他にもある。たとえば、20世紀初頭シカゴにおける都市の人口密集、あるいは昨今の先進諸国における大量の移民流入等など。これも、人口数が問題なのではなく、それを問題として構築する側の論理が問題だとも言える。神戸のひとつの少年犯罪が、酒鬼薔薇事件という典型例して構築され、影響力をもち、「少年犯罪の増大」という認知が行われたことなどにも注意しておきたい。

いずれにしても、団塊の世代は非常に偶然的に影響力をもち、対抗的な文化スタイルを形成していった。その背景には、東西冷戦を背景としたイデオロギー対立、反戦運動、公民権運動等がある。そこに主体論やアイデンティティ論といった高級文化としての学問理論が照らし合わされる時に、対抗文化としての若者文化という同定が行われた。こうした偶然性が、大量消費社会や、参加民主主義へと接続され、若者文化のコンテクストは形成された。

２－３．実体論から関係論へ

次に、融解説が若者文化という実体の融解を指摘し、関係志向の増大を指摘していることについて検討する。山田 [2000] は、一定の実体的なアイデンティティを持った文化への志向が消失し、関係性への志向が純化されていることをもって、若者文化の融解の根拠となした。同定すべき実体の融解という議論は、現実の若者世界のありようを上手くとらえている。

この議論は、実体論から関係論へという移行を、存在論レベルで解釈するという点で、卓見であると思われる。また、この議論は、独自の組織論研究を前提に展開されており、文化論を一つの社会性の文脈に接続する試みとしても、興味深い。

３．抽出／融解説の妥当性

以上、下位性、対抗性、実体性という三つの論点をめぐり、融解説の検討を行った。団塊世代若者文化というひとつの若者文化の抽出と融解を指摘した点で、融解説は意義をもつ。抽出と融解というサイクルを立論したことは、独創的である

と思われる。しかし、若者文化が融解したという立論の妥当性は、一つの若者文化、ひとつのサイクルの抽出／融解に限定されるべきであるというのが本稿の立場である。

3－1　下位性の抽出＝顕在化／融解＝メイン化について

3－1－1　抽出／融解の周流

団塊世代は、圧倒的な影響力により、さまざまな実験的試行を現実化した。60年代以降、団塊世代は加齢とともにライフコースの各段階において、さまざまなデバイドを顕在化し、批判的に対象化し、「サブ」を「メイン化」していった。すなわち、性、青年、加齢、障碍、国際的従属性、環境等などをめぐり問題を提起し、問題は社会的に認知されるに至っている。(4)

そのなかで、対抗的な社会運動のスタイルは変化し、リソースフルなチャンネルとしてのアンダーグラウンドなチャンネル、インフォーマルなセクターが顕在化していった。あるものは「トリクルダウン」とは異なるボトムアップなチャンネルとして開発され、制度化された。

しかし、なお潜在したままのものを皆無と断じることはできないであろう。人口の増大、密集などの条件がなくとも、顕在化の契機となるような、場や、インフラ（たとえばネット環境）の整備、あるいは運動の噴出など、条件が整えば、未開発の文化が顕在化する可能性はある。(5)

(4)　本稿の「メイン化」という動態に着目し、本格的に展開したのは仲川秀樹［2002］である。仲川は、ブルーマーの大衆論、集合行動論などを読み解き、さらにジンメルやシブタニなどの見地を整理し、サブカルチャー研究に応用した。そして、サブ→メインという流行経路の開示を指摘した。同様の「メイン化」という論点について、難波功士［1999］は「バブルアップ」として表現している。吉見俊哉は、サブカルチャー論の先駆としての逸脱論に言及した際に、規則違反者と判定者、レッテルを貼られるものと貼る者の「逆転」をベッカーが認識していることの重要性を強調している（吉見［1998=2003：95］）。こうした読みが、吉見のカルチュラルスタディーズ読解の基本にあることは、「メイン化」を問題にする本稿の立場からも、注目されてよいだろう。岡田［2003］は、マスカルチャー、ポピュラーカルチャーとの関連でサブカルチャーを吟味している。「マスカルチャー→サブカルチャー→ポピュラーカルチャー」というサイクルを指摘した見解として、非常に興味深い。大山昌彦［2003］は、成美弘至［2001］や難波功士［1997］をリファーしつつ、サブカルチャーという用語が欧米と日本でちがうことを指摘している。すなわち、日本では、「娯楽性の高いメディア文化とその消費者に用いられる」のに対し、欧米では、「メディアや文化そのものよりも『下位集団』を指す」という。サブカルチャーの二面性を指摘した見解として興味深い。

(5)　「サブ→メイン」という流行経路は、団塊世代がまったく偶然的に一回性のものとして開示したにすぎないという議論も成り立つ。「メイン化」をめぐる一つの争点として確認しておきたい。

よって、抽出と融解のプロセスを一回限りのものとして固定化して、一つのサブカルチャー＝団塊世代若者文化の問題を若者文化一般、さらにはサブカルチャー一般の問題へと拡大解釈され、議論が、若者文化の終焉説、サブカルチャーの終焉説に接続されるとすれば、問題である。すると、団塊世代によってせっかく顕在化したサブカルチャーという回路の様々な可能性が、隠蔽されてしまうのではないかという問題である。(6)

たとえば、マンガやアニメやゲームなどのいわゆるポップカルチャーは、かつてはサブカルチャーであり、「正しい大人」が享受するべきものではなかった。それが、社会的に認知され、さらには世界的な影響力をもつに至った。アニメ関連の市場規模は日本からアメリカへの鉄鋼産業輸出額の４倍（02年に43億5911万ドル：ジェトロ調べ）というような数字まで、報告されるに至り、国興しの切り札として期待されたりもしている。しかしそうなると、日本の先進性ばかりが主張され、「途上国」のもっているいろいろな可能性の芽は、いささか乱暴に分別・処理されてしまう可能性がある。また、「最近の若い者は、ゲームばかりでマンガも読まない」などという言説が、発せられたりもする。こうした固定化したメイン、そしてそれにより潜在させられている多様なサブーメインの経路を異化しつづけることが、サブカルチャー社会学の課題となる。(7)

３－１－２　「ノーマライゼーション」の超克？

本稿がとりわけ注目するのは、サブカルチャーが人口に膾炙することで、メイン自体が作り替えられるという点である。上でも述べたように、60年代の若者の

(6)　今日、汚いからだで街を歩き、人前で平気で抱き合い、誰とでもさかる若者が、問題になっている。ゲームや携帯に没頭する「親指族」は、脳が退化しているという言説もある。そのうち直立歩行をやめ、路上で排便するようになるという、悪い冗談まで飛び出す始末である。しかし、サブカルチャー研究は、こうした「動物化」（東浩紀［2001］）したとされる若者たちの文化（身体の「構え」＝attitude)、そのポップであやうい「かっこよさ」にこそ注目すべきなのかもしれない。「動物化する者」の文化と社会性は、 ── 高齢者、田舎者、障碍者、都市下層等、サブカルチャーからも暗黙に排除されてきた者たちのそれと同様 ── 今日、サブカルチャー研究の重要な調査課題、理論化の課題となっているように思われる。70年代のパンクやモッズを研究したヘブディッジ（Hebdige［1979］)、あるいは遡って60年代の青年文化などでは、「スタイル」(style) が問題であった。しかし、「態度取得」という観点から言っても、身体の「構え」に着目する視点は、今日重要性を増しているように思われる。

(7)　こうした問題を異化するために、伊奈［1999］は「サブカルチャーのサブカルチャー」という視点を提起した。すなわち、これは、「上位－下位」の相対性、可変性を批判的に対象化する視点である。すべての「上位－下位」関係は、特恵性を帯びることなく、相対的に根拠づけられつつも、異化されることが、肝要だと思われる。

ファッション、髪型、音楽、生活様式、政治的交渉様式、場としてのライブハウス、カフェ、ストリートなどは、文化のあり方を一新した。同様の顕在・潜在するメイン化を、今日の文化動態のなかに読解することもできるだろう。これは、一方で、ビジネス、行政、社会運動、マスコミなどのメインストリームに動員される文化資源に着目するということではあった。

しかし、他方で、もう一つ重要な意味がある。それは、「サブーメイン」構造が、一定のデバイドを具現する場合――すなわち女性、障碍者、イナカモノ、高齢者等々の文化をサブカルチャーとして考える場合――には、デバイド解消＝バリアフリー化の方向性として、単純な「ノーマライゼーション」を超克するような文化が探求されるということである。一例を挙げれば、障碍者スポーツのおもしろさは、障碍者も「健常者並み」にスポーツを楽しんでいるからではなく、「健常者」も楽しめるようなこれまでにないスポーツのかたちがそこに提示されているからということである。(8)

３－２　対抗性の融解＝商業化と制度化について

ともあれ、抽出／融解される「サブーメイン」構造の多元性と周流が理論的に把握されなくてはならないというのが、本稿の立場である。その場合、サブカルチャーの商業化や制度化が、あるいは文化資源の動員と開発という視点から、あるいは営利的な視点から、あるいは運動論的な視点から問題にされるだけではなく、市場や政策の「外部」にあるものの含意や拡がりを吟味する必要があるように思う。

拙著『サブカルチャーの社会学』では、そうした「外部」を批判的に対象化するものとして、「サブカルチャーのサブカルチャー」という視点を提起し、「田舎」「障碍者」「高齢者」などの問題を提起した。さらに、こうした「外部」に文化の市場を創ること、あるいは政策的に文化を育成するといった論点は、文化一般の市場外部性、政策外部性を照らし出す。ドラスティックな政策的育成は、「喜び組」

(8)　この他に、今日注目される例としては、たとえば、映画監督北野武の活動や、マンガを原作とした映画などがあげられるように思う。前者は、お笑い系の文化を拡張したものであるというのが、伊奈［1999］以来の筆者の見地である。お笑い文化や、その背景にある戦後の風景が、アート系映画として作品化されているというところに、筆者はビートたけしの一貫した制作姿勢がみてとれるように思っている。すなわち、「アートのお笑い化」という論点である。マンガ源流の映画は、映画自体のプロモーションビデオ化、アトラクション化、ＣＧ化などとならんで、批判も多い。一種の映画の拡張として注目に値するように思われる。映画というアートを中心化する言説を異化するからである。

まがいの軍団育成につながるかもしれないし、また過度の商業主義は、商品としての文化の魅力をうばいさるだろう。

しかしまた、文化は、政策や市場から隔絶されたものと言い切ることもできないだろう。若者文化を俗悪さから、隔絶して、「聖」化する議論がある。しかし、その出発点から若者文化は体制的なもの、「俗なるもの」としてのビジネスなどと無縁ではなかった。たとえば、ロックンロールの名付け親と言われるＤＪアラン・フリードの賄賂事件。記念碑的出来事であったウッドストックコンサートと同様に人間的解放の場を創造しようとしたワイト島他のコンサートにおける商業性をめぐってトラブル等々。

B－Boy 文化などにおいては、依然として「売れること」への警戒があることもまた事実である。しかし、ビジネス性がただちに対抗性の融解と断じることはできないであろう。今日では NPO などのいわゆるアドボカシー的社会運動においても、商業的競争力が問題になったりもしている。そこでは、官僚的なものへの対抗手段として、「民」の論理が問題になっている。このように対抗性の図式は、いろいろな局面において、可変的に編成されるものであることには、注意をしておきたい。

３－３　実体性の融解＝関係志向の優位化について

こうした対抗性同定の論理を、実体論ではなく関係論にたって考察することも可能であろうと思われる。この論理を機能主義の見地から問題にするのが、本稿の立場である。この場合の機能主義とは、事物を機能（function）に変換し考察する方法的立場のことである。機能とは、関係の見地から見た有のことであり、実体の見地にたつ有論と対立する（Rombach［1965-1966=1999：1-57］、特に訳注２）。機能主義は、事物を一定の関係性に変換してとらえる。これにより論理的な関係性に立脚した思考が可能になる。とりわけ関数（function）関係への着目は、自然科学の数学化をうながし、数理モデルを運用する精密な実証主義的方法へと機能主義は橋渡しされた。機能主義の発想は近代以前から存在するが、20世紀に機能主義は一つのパラダイムを生み出した。その要点は、一定の関係をなす全体（意識、集団、組織、システムなど）のなかで変化する要素的部分（観念、欲求、役割など）のはたらき（function）に着目することである。

この見地から見るならば、「サブ－メイン」という関係は、一定の関係的全体のなかにおける機能関係であり、そうした枠組において、一定の開発動員される

べき資源性などなどをそこに読み込むことも可能になる。上位下位の関係図式によって具体的に提示されるスタイルとしてサブカルチャーのアイデンティティをとらえることで、融解的な現実という議論に帰結する文化相対主義的な枠組とは異なり、その都度その都度の具体的な一定の根拠づけを持った「サブーメイン」構造をめぐる「文化相関主義」(宮島喬［1999：160]）的な視点が確立される。

「文化相関主義」について、宮島喬は次のように説明している。「いわゆる『文化相対主義』が、諸文化現象の間に価値的な優劣はないという点にアクセントを置き、一般化し、個別対象への価値関与はもとよりその理解の努力にも消極的であるのに対し、ここで著者の言う『文化相関主義』は、文化現象をそれを成立させた歴史的・社会的・自然環境的な条件と相関させながら理解するという営為をいう。一義的な評価の視点を設定しないという点では相対主義的であるが、相関関係の理解を重視する結果として、当該社会との関連で、一定の評価の視点をとることはありうる」(宮島喬［1999：160]）。ここで、「評価」を資源動員、「歴史的・社会的・自然環境的な条件」を一定の機能的全体のそれと考えることで、「文化相関主義」を機能主義的に読みかえることも可能になる。

こうした「文化相関主義」的な機能主義にたった文化論の視点は、サブカルチャーはメイン化し、対抗性を喪失し、融解してしまったという議論に対して、争点を提示している。すなわち、潜在・顕在する「サブーメイン」が多極化し、周流する構造動態を見据えてゆくという論点を提示することにもなる。(9)

さらに、こうした見地から極言するならば、「今日、サブカルチャーとして若者文化に注目することに意味があるとすれば、それがビジネス、行政、運動、マスコミ等に動員されるべき未開発の文化資源であるから」(伊奈［2003]）ということになるように思う。このようなメイン化は、ビジネス、行政、運動、メディアなどへの資源動員であり、一種の生活世界の植民地化であるという批判も当然成り立つ。しかし、学問的に論じること自体が、学問的な資源動員であり、それを特恵化することの方が問題であると筆者は考える。何らかのかたちでサブカルチャーを論じることは、さまざまな動員の仕方の「せめぎあい」(吉見俊哉)、イデオロギー対立のなかにおいて、立場を表明することと同義であると思われる。

最後に、こうしたサブカルチャー概念の原点であるシカゴ学派のコンテクスト

(9) こうした機能主義的な実在把握や、それに立脚した「サブーメイン」構造の社会性把握について、廣松渉の存在論やルーマン他システム論などに接続する意図はない。むしろ筆者が念頭においたのはミードやマンハイムの議論であり、ロムバッハ［1999］の機能主義有論（存在論）である。

を検討し、サブカルチャー研究と機能主義の関わりについて検討を加えておきたい。そこにおける立場の「せめぎあい」を確認したいと思う。それは、知識社会学と機能主義と社会病理学とサブカルチャーの社会学が、交錯するコンテクストである。

4．サブカルチャー研究と機能主義

4－1．シカゴ学派の機能主義とサブカルチャー研究

4－1－1．サブカルチャー研究の先駆としてのシカゴ学派

シカゴ学派は、人口の流入、都市化にともなう社会解体という危機的状況と社会学的に向かい合った。そして、シカゴ学派は、移民や貧困層など「はみ出し者」の世界、「もの語らぬ者」の世界を調査した。社会踏査とも呼ばれる足を使った詳細な観察、聞き取り等のフィールドワークが行われた。ソーントンらのリーディングス（Gelder & Thornton［1997：11-39］）は、シカゴ学派をサブカルチャー研究の先駆として位置づけている。

たとえば、1915年に刊行されたパークの『都市』は、未開部族について人類学が行っているのとまったく同じような方法で、都市を研究することができると説いた。また、1932年のクレッシー『タクシー・ダンスホール』の研究は、ダンスホールをフィールドワークした。これらの研究では、まだ「サブカルチャー」という用語が使われているわけではないが、サブカルチャー研究の萌芽がそこにはあり、また研究のおおよそのかたちも提示されていると、ソーントンは言っている（Gelder & Thornton［1997：12］）。

暴力、性、酒・くすり等、危険な誘惑に満ちた「はみ出し者」の世界は、それまでは、およそ文化とは無縁なものと考えられていた。シカゴ学派の社会学は、そこに独自の文化があることをはじめて認知した。その調査法は、「社会病理」の統計的把握と政策的処理だけではなく、「はみ出し者」独自の自律性、能動性＝可能性を視野に入れた実践・方法であったと見なすこともできよう。

4－1－2．機能主義の先駆としてのシカゴ学派

理論的には、トーマスとズナニエツキの状況規定の概念に代表されるように、シカゴ学派は、人間の能動性に注目していた。機能主義心理学の先駆とされるデューイやミードも、――「はみ出し者」を含めた――あらゆる人々の態度取得を可能と考えていたし、それが一般性を創発することによって社会は再編されう

るものと考えていた。

こうした立論は、社会の亀裂を深刻に考えない点や、人間の能動性に楽観的に期待している点で、今日的にはとるに足らない議論とされることも多い。また、サブカルチャー論の観点からも、社会解体が安直に再編・統合されるものであるとすれば、サブカルチャーのサブたる所以への理論的洞察を欠いた議論と判断せざるをえない。しかし、機能主義の出発点としてのシカゴ学派に、すべての者の「役に立ち方」を探求する意図があったことは確認されるべきであると思われる

分析的リアリズムに基づく洗練されたシステム論を提示した構造機能主義に比べれば、シカゴ学派は明らかに理論的不徹底であると言われる。また、自然科学や経済学にみられるような微分方程式的な手法を生み出した計量調査法と比べれば、「はいつくばる実証主義」と称されるシカゴ学派の調査法は、いささか分析性に欠けるとも言われる。しかし、システム論理や調査手順の合理性を主張して、合理的概念や調査票を「サンプル」や「ケース」と称される被調査者――サブカルチャー研究の場合「はみ出し者」たち――に「突き付ける」行為それ自体への反省を促す要素がそこにあることを、看過してはならないように思われる。いずれにしても、シカゴ学派は先駆的／過渡的な存在として評価される。(10)

さらに、こうした過渡的性格を両義性と読みかえることも、可能かもしれない。両義的なもののあやうい不安定な均衡に注目するいささか煮え切らない視点、「あいだ」（北田［2003］）に注目する視点は、文化の微細で曖昧な“あや”やニュアンスを丁寧に解読してゆく上で、重要性を増しているように思う。とりわけサブ

(10) 「はみ出し者」の文化の調査方法としては、「質的」な方法がとられることが多い。これは、アンケートなどの量的方法を適用することが難しいことがあげられる。と同時に方法的反省を喚起する面がある。逆に言えば、反省性が欠如している場合、Mills［1943］でシカゴ学派が批判されたように、質的方法も同様に批判の対象となる。問題は、調査過程の批判的対象化であって、質的、量的という方法的区別ではない。これと関連して、ついでに付言すれば、最近では佐藤健二［2003］により、社会調査について、質的・量的方法を対立させることへの疑問も提起されている。佐藤氏は、さらに調査方法の発展にも言及している。コンピューターの発達はドキュメントデータのデータプロセッシングを可能にし、質的対量的といった方法的区分が無意味化されているというのである。こうした社会調査論的な現況は、サブカルチャーのメイン化をめぐる研究にとっても示唆的である。メイン化とは計量的な世界との接続を不可避のものとなしており、サブカルチャー的な世界のフィールドワーク成果をパソコンによりデータプロセッシングしていくことの意味、あるいはアンケート調査を併用し「使い分け」することの論理を省察・吟味し、意識的に適用するというプログラムを提起しているからである。学問的に、文化研究をすることは、結局一つの資源動員に他ならず、それを特恵化することはできない。その権力性（麦倉［2003］）は、常に反省されるべきであるし、調査することがどのような資源動員なのか、常にチェックされる必要があるだろう。

カルチャーのようなたやすく割り切れない文化の場合はなおさら、そういうことが言えるだろう。

４－２．批判的機能主義とサブカルチャー研究

４－２－１．『アウトサイダース』の画期性

シカゴ学派を手放しにサブカルチャー研究の先駆として位置づけることに対し、吉見俊哉［2003：90-96］が――カルチュラルスタディーズを踏まえた理論的立場から――批判的な指摘をし、注意を促している。吉見は、シカゴ学派の都市エスニシティ研究から、サブカルチャー研究史の検討を始めている。しかし、またその機能主義的本質を厳格に弁別し、厳格にテキスト批判している。シカゴ学派の議論は、基本線としては、あくまでも「社会病理」学的に、社会解体の再編を眼目としたものであると言っても過言でなく、多くの議論が機能主義的な性格を帯びている。したがって、サブカルチャー研究の先駆と手放しに賞揚するのは、いささか早計ではないか。吉見のテキスト批判は、このように要約されるだろう。

そして、吉見は、サブカルチャー研究という点で、画期的なものは、明確に「はみ出しものの文化」を主題化したベッカーの『アウトサイダース』(1963年出版)であると言う。ベッカーの逸脱論も、過渡的な位置づけを与えられ、バーミンガム学派へと議論は接続される。若者文化というサブカルチャーが噴出した60年代になって、明示的にサブカルチャーが議論されだしたということに、筆者は特に反論する必要は感じない。ゴフマン、さらにはフーコーの議論へと接続され、検討されているベッカーの議論は、「アウトサイダーのレッテルを貼られた人間が、そうした事態に対して、まるで違った見方をすること」、「規則違反者が判定者をアウトサイダーと見做すこと」(吉見［2003：95］)に着目した点で、画期的なものであると、筆者も思う。

４－２－２．ミルズの社会病理学批判

ミルズは、ベッカーをスーパーバイザーとして学位を取得した（Oakes & Vidich［1999:2;105-106］）翌年の1943年に、「社会病理学者の職業イデオロギー」という論文を書いている。ミルズは、この論文で「社会病理学」批判を行っている。そこでは、こうした議論も批判の対象となっている。ミルズの批判は、「解体と再編」が個別状況的に論じられているだけで、扱っている問題に社会構造的な位

置づけがなされていないというところに集中している。「解体と再編」を局所的、抽象的ゲームに変換し、狭窄的視野から楽観的な結論を強引に導出していることを、ミルズは批判している。

ミルズの立論は、一方で機能主義の考え方を知識社会学的に駆使して、社会病理学の言う再編と統合を、いわばいかようにもこしらえることのできる安直でイデオロギー的な「病理づくりゲーム」「問題づくりゲーム」「動員ゲーム」「解決ゲーム」としてとらえ、こうしたゲームを創り出す「様々な全体」の意匠を戯画化するものであったと解釈できるように思う。同様の言い方をすれば、ミルズの立論は、ゲームの戯画、状況の戯画を、――「文化相関主義」的に当時の最も重要な評価の根拠とミルズが考えた――社会構造の戯画に接続しようとするものであったと言えるだろう。

４－２－３．ミルズの批判的機能主義とカルチュラルスタディーズ

こうしたミルズの方法に内包される「自己反省の社会学」（グールドナー）は、ミルズをして、中南米、東欧等などの人々が発する声に耳を傾けさせた（Mills et als. [1950]、Mills [1958/1959/1960]）。これは、「観察者が前提としている認識の地平を相対化していく契機（アーウィン）を内包した社会的世界を理解」（吉見 [2003：95]）するというカルチュラルスタディーズの方法とも共通点を持つ。

また、ミルズの場合、こうした「もの語らぬ人々」の声に耳を傾けることは、その文化を認知することと同義であると言ってもよいように思う。ミルズは、アメリカ社会の平等性・多元性を主張する言説に対し、アメリカ社会の不平等性・画一性を主張し、社会構造論的視点の重要性を主張する。後に、こうした言説が護教論的な我田引水のイデオロギー言説になることを警戒したミルズは、「よりどころのない立場」（Aptheker [1960]）であると批判された。しかし、知識人の反省的営為を純粋化し、あえて韜晦的にその立場を選択したとも言えるように思う。ミルズは、機能主義的に――性格と社会構造モデル（Gerth & Mills [1953]、Mills [1951]）、エリート大衆モデル（Mills [1956/1958/1959]）等々――自在にモデルをつくり、反省を喚起するクレイムを発し続けたと言える。こうしたミルズの見地は、やがてトム・ヘイドゥンをはじめとする60年代のラディカルズに継承され、さらにはアドボカシー的な運動や、グローバルガバナンスといった能動的参加の理念、ネットワーキングなどのつながりをうみだしていることは、上で述べたとおりである。

４－３．批判的機能主義の文化研究

機能主義のコンテクスト、知識社会学や批判理論との関わりでの展開、批判的機能主義と文化研究との関わり、そして批判的機能主義にたった文化研究のプログラムを検討してきた。それを箇条書き風に整理しておこう。

・サブカルチャーという文化が機能主義的社会統合の文脈で、シカゴ学派によって学問的に認知された。
・そこでは、
　サブカルチャーの主体の能動性を見据える視点
　社会病理を再編統合しようとする視点
　が混在している。
・すべての人々の社会参加が可能であるという楽観主義がそこにある。そして、それが故に、サブカルチャーの学問的認知が可能になった。
・また、混在する両義的なもののあやうい不安定な均衡に注目し、その均衡の微妙なニュアンスを丁寧に分節してゆく視点をそこに見いだすことも可能である。
・批判的な視点は、社会の構造的亀裂を批判し、楽観的、機能主義的な全体統合のイデオロギー性を批判することになる。イデオロギー性の認識において、マンハイムの知識社会学は、アメリカ社会学に影響を与えた。
・他方社会統合の論理を洗練する方向性からすると、シカゴ学派の機能主義的な不徹底が批判され、シカゴ学派は過渡的な位置づけが与えられる。それは、一方で構造機能主義として完成され、他方で数量的社会調査法によって完成された。
・この統合の論理は、ミルズにより、アメリカ社会賞揚のイデオロギーとして批判された。ミルズの批判的な機能主義の考え方は、様々な資源動員の自覚、様々な意匠の併存への反省などとして、自己反省的なサブカルチャー研究のプログラムを提示しうる。

５．総括

行論全体を総括しよう。まず、団塊世代若者文化という「ひとつのサブカルチャー」の抽出／融解というプロセスを解明した点に、抽出／融解説の意義を確認することができる。この意義を、二点に整理しておきたい。

まず第一に、サブチャンネルの抽出＝顕在化というプロセスに光があてられたこと。団塊世代の圧倒的な影響力は、実験的スタイル、社会運動、あるいは流行、ビジネス、政策などとして、さまざまなメイン化の動態を顕在化させた。偶有的な対抗性とともに、顕在化の過程を、サブカルチャー概念の重要な契機として確認しておきたい。第二に、融解の契機と関わっては、高級文化の大衆化というトリクルダウン説に対し、「メイン－サブ」の動態的構造、サブのメイン化というサイクルを、抽出／融解説が顕在化させたことである。端的に言えば、若者、イナカモノ、高齢者、障碍者、あるいはオタク、ひきこもり等のスタイル、スペース、ネットワーク等のなかに、追随的メイン性を読み込むことではなく、メインを変えるような要素を――ネガポジどちらにかぎらず――読みとってゆくことが、サブカルチャー社会学の課題になるように思われる。

しかし、融解を「サブ－メイン」構造一般に拡大解釈し、サブカルチャーの終焉といった議論に接続されるとすれば問題である。多元的な「サブ－メイン」サイクルの伏在・潜在を否定しさることはできない。再三述べたように、団塊の世代以外にも、都市への人口密集や、大量の移民流入などを契機として、サブカルチャーは顕在化してきた。さらに潜在するサブチャンネルは、多数あるであろうし、その「サブ－メイン」構造を、顕在化させる契機となる「場」やインフラの解明（たとえばネットワークの整備、情報化の進展など）は、サブカルチャー研究の重要な課題となる。あるいは商業的、行政的開発、あるいは運動主体形成といった議論に、議論を回収し、ただちにメイン化（あるいは営利化、政策化、あるいはディバイド解消）しきれない時に、サブカルチャーという概念はとりわけ有効性を持つものであるように思われる。

付記：本稿は、2003年10月に行われた第76回日本社会学会大会の一般報告部会「文化と社会意識２」で報告した同一タイトルの報告原稿に、そこでの議論などを踏まえ、大幅に加筆したものである。フロアからご質問、ご批判いただき、また後日メールでさらにコメントや統計資料などをたまわった原俊彦氏、および報告後あたたかなお言葉をたまわった山田真茂留氏――本稿が依拠する抽出／融解説の提唱者――に感謝したい。原氏のコメントと資料は、本稿のなかでも活用させていただいた。なお、本稿は、科学研究費基盤研究Ｃ『サブカルチャーの「サブ－メイン構造」の「融解」説と「多極化」説』（2000－2002年）の研究成果の一部である。

文献：

Aptheker, H., 1960, *The World of C. Wright Mills*, Marzani and Munsell =1962 陸井三郎訳『ライトミルズの世界』青木書店

東浩紀, 2001,『動物化するポストモダン――オタクから見た日本社会』講談社新書

Becker, H. S., 1963, *Outsiders*, Free Press.=1978、村上直之訳『アウトサイダーズ』新泉社 .

Gelder, K. & Thornton, S. eds., 1997, *The Subculture Reader*, Routledge

Gerth, H.H. & Mills, C.W., 1953, *Characte and Social Structure*, Harcourt Brace = 1966　古城利明・杉森創吉訳『性格と社会構造』青木書店

Hayden,T., 1964, *Radical Nomad: Essays on C. Wright Mills and His Time*. unpublished Ph.D. Dissertation. Univ. of Michigan.

――― , 1988, *Reunion: a Memoir*, Collier Books.

Hebdige,D, 1979, *Subculture:the meaning of style,* Methuen&C Ltd =1986　山口淑子訳『サブカルチャー―スタイルの意味するもの』未来社

Horowitz.I.L.ed., 1963, *Power Politics and People,* Oxford Univ.Press =1971、本間康平・青井和夫監訳,『権力・政治・民衆』みすず書房

伊奈正人, 1999,『サブカルチャーの社会学』世界思想社

―――, 2000,「ミルズ知識社会学再考：序説的素描――『アメリカ的なもの』と『サブカルチャー的なもの』と知識社会学」『経済と社会』第28号

―――, 2003,「サブカルチャーの社会学」『洋泉社ムック２　社会学入門』洋泉社

北田暁大, 2003,「シュッツ――『あいだ』で思考しつづけた現象学的社会学者」『洋泉社ムック２　社会学入門』洋泉社

小谷敏, 1998,『若者たちの変貌――世代をめぐる社会学的考察』世界思想社

Miller,J., 1987, *Democracy is in the Streets: From Port Huron to the Siege of Chicago*, Simon and Shuster.

Mills.C.W., 1940, "Situated Action and Vocabularies of Motive" *American Sociological Review*, 6. Decem. → Horowitz [1963]＝1963, 田中義久訳「状況化された行為と動機の語彙」

―――, 1942, *Sociological Account of Pragmatism*, Ph.D. Dissertation, Univ of Wisconsin →1964 Horowitz ed. *Sociology and Pragmatism,* Oxford Univ.

Press =1969, 本間康平訳, 『社会学とプラグマティズム』紀伊国屋書店
———, 1943, Professional Ideology of Social Pathologists, *American Journal of Sociology* VolXLIX No.2 (Sept.,1943)→ Horowitz.I.L [1963]=1971, 青井和夫訳「社会病理学者の職業イデオロギー」
———, 1951, *White Collar*, Oxford Univ. Press =1957 杉政孝訳『ホワイトカラー』 東京創元社
———, 1956, *The Power Elite*, Oxford Univ. Press =1958 鵜飼信成・綿貫譲治訳『パワーエリート』上下, 東京大学出版会
———, 1958, *The Causes of World War Three*, Simon & Schuster =1957 村上光彦訳『第三次世界戦争の原因』みすず書房
———, 1959, *The Sociological Imagination*, Oxford Univ. Press =1965, 鈴木広訳『社会学的想像力』紀伊国屋書店
———, 1960, *Listen Yankee*, McGraw Hill =1961, 鶴見俊輔訳『キューバの声』みすず書房
Mills,C.W., Senior, C. & Goldsen, R.K., 1950, *The Puerto Rican Journey: New York's Newest Migrants*, Oxford Univ. Press =1991奥田憲昭他訳『プエルトリカン・ジャーニー ── ニューヨークに惹きつけられた移民たち』恒星社厚生閣
宮台真司・大塚明子・石原英樹, 1993, 『サブカルチャー神話解体―少女・音楽・マンガ・性の30年とコミュニケーションの現在』PARCO 出版
宮島喬, 1999, 『文化と不平等──社会学的アプローチ』有斐閣
麦倉泰子, 2003, 「障害とジェンダーをめぐる複数の視線──知的障害を持つ男性のセルフ・ヒストリー」桜井厚編『ライフストーリーとジェンダー』せりか書房
仲川秀樹, 2002, 『サブカルチャー社会学』学陽書房
難波功士, 1997, 「『サブカルチャー』再考」『関西学院大学社会学部紀要』78号
———, 2000, 「ファッション雑誌に見る“カリスマ”」『関西学院大学社会学部紀要』87号
成美弘至, 2001, 「サブカルチャー」吉見俊哉編『カルチュラルスタディーズ』講談社
Oakes, H. & Vidich, A.J., 1999, *Collaboration, Reputation, and Ethics in American Academic Life: Hans H. Gerth and C.Wright Mills*, Univ. of Illinois Press.
岡田宏介, 2003, 「マスカルチャー、サブカルチャー、ポピュラーカルチャー

――文化理論とイデオロギー概念の変容」『ソシオロゴス』27
大山昌彦, 2003,「若者サブカルチャーとポピュラー音楽」東谷護編『ポピュラー音楽へのまなざし』勁草書房
Rombach, H.,1965-1966, *Substanz System Struktur---Die Ontologie des Funktionalismus und der philosophishe Hintergrund der moderunen Wissenshaft.* 1&2 Karl Alvert Verlag=1999, 酒井潔訳『実体・体系・構造』ミネルヴァ書房
上野俊哉・毛利嘉孝, 2000,『カルチュラル・スタディーズ入門』ちくま新書
山田真茂留, 2000,「若者文化の析出と融解」『講座社会学７文化』東京大学出版会
吉見俊哉, 1998,「カルチュラルスタディーズとサブカルチャーへのまなざし」山田富秋好井裕明編『エスノメソドロジーの想像力』せりか書房→「都市エスノグラフィーからサブカルチャー研究へ」(吉見 [2003])
――――, 2000,『カルチュラルスタディーズ　思考のフロンティア』岩波書店
――――, 2003,『カルチュラルターン, 文化の政治学へ』人文書院